柴　着　に　つ　い　て

(I)　北潟湖の柴着漁業

武生高等学校　　五十嵐　　清

冬の湖の風物詩に柴着がある。柴着「を湿見ともいつて」いるが、その詳しい意味は解らない北潟湖や三方湖畔に点々と見られる柴の山は叙情的である。

柴着はいつ頃から始められたのであろうか。冬に入つて湖の水温が急に下つてくると、動きのにぶくなつたフナやコイが柴の中にもぐり込んで冬ごもりに入る。そのような魚の習性をうまく利用した冬の漁法で、柴着のまわりをすつかり網で囲つて、一匹も逃さずとりあげるのである。魚こそ知らぬが仏で、網にかゝつて始めて眠りからさめ、驚いてはね上げるときはもうおそい。

柴着は福井県では北潟湖と三方湖の2例がある。湖面に見られる柴の山はどちらも一見似ているが、その漁法にはかなりの違いがみられる。このような違いはその土地の条件と、深いつながりをもつていて、大変興味深い。筆者は北潟湖のものを北潟式、三方湖のものを三方式と呼ぶことにした。始めに北潟式の柴着について紹介したい。

北潟湖は大聖寺川と合して日本海に開いていて面積2.73Km^2、水深2m、周囲14Kmの汽水湖である。海に最も近い内海は高塩性性の汽水であるが、大川、黒文字、みようごの湖水は低塩性で、湖の周辺に新しく開かれた水田は湖の水を汲み上げて灌漑用水に利用している。柴付は黒文字、みようごの湖畔にだけ設けられていて北潟独特の風物となつている。柴着に用いられる材

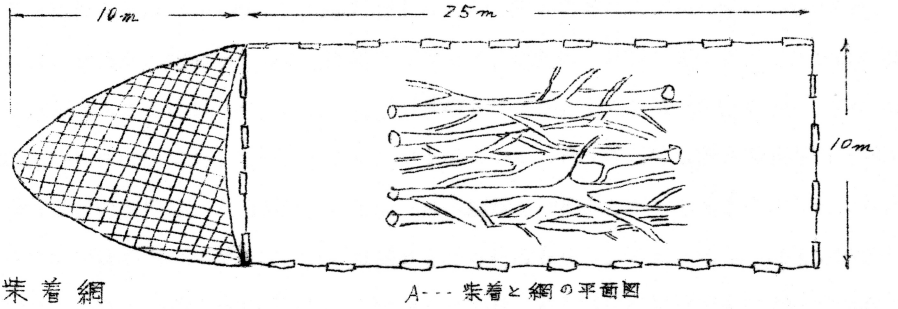
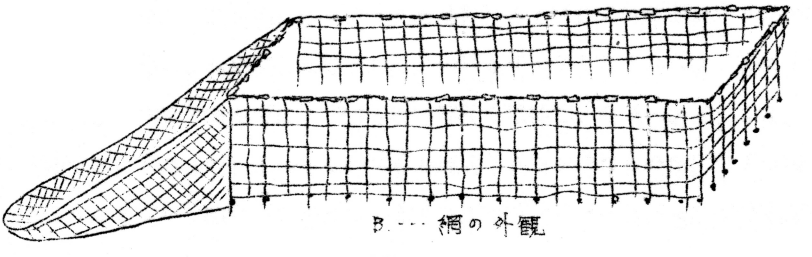


Fig.2　柴着網

A･･･柴着と網の平面図



B･･･網の外観

料は主として葉づきのままの赤マツの枝であるが、三方湖の雑木を用いた柴枝とは違つていて、しかも太いマツ枝が用いられる。その柴の山の背が水面に点々と見られるわけである。1ケ所の柴着にはおよそ100本～150本の枝が用いられている。

秋も終りに近づいて水温が下つてくると、越冬のためい、住み場を求めて柴の山の中にもぐりこんでくるが、水温の最も低い1月上旬頃から3月中旬頃までが柴着漁期といえる。その最盛期は2月で、湖面を撫でる冷たい風は、いかにも冬の漁業にふさわしくきびしい。柴着のまわりを網ですつかり囲い、その中のマツ枝を一本一本取り除いてゆく。水面の枝は除き易いが、泥の中に埋れた枝は長い竿の先に仕掛けた鎌で探り当てて引上げる。引上げられた枝は舟の上に山積みにして、次の柴着の予定地に配置換えである。100本もの枝であるだけに舟に10～20杯にも及び、すつかり枝を除去するまでには半日がついやされる。枝の取り除きが一応終ると数隻の小舟で網を次方に縮めてゆく。網の大きさは横25m縦10mで片方に付りつけた袋網の中に魚を追い込み取り上げられる。主な魚種はコイ、キンブナ、ゲンゴロウブナ（ヒラブナ）、オイカワ、ウグイ、タモロコ、ナマズ、とテナガエビなどである。中でもコイフナ、テナガエビは柴着の主要なもので時には50cm程のコイが数10匹も入ることがある。これらの魚は福井、石川、両県の温泉地に送られ需要が多い。

冬の漁業として柴着に大きな期待を寄せられているだけに組合では力を入れているが、時に数隻の舟が出て1網に小ブナが10数匹のこともあり、この漁業の問題点を考えてみ

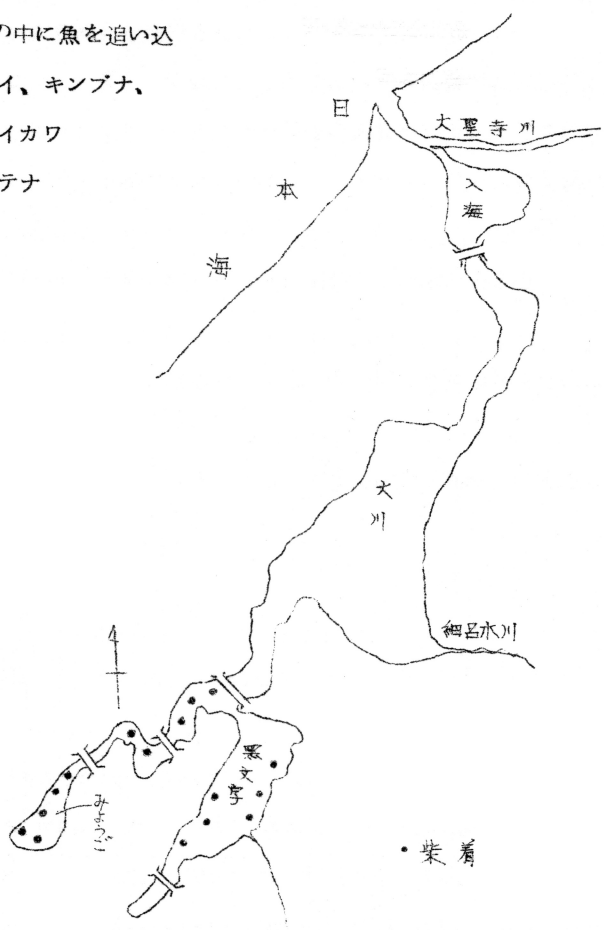


Fig 4. 北潟湖の柴着の配置

る必要があるように思われる。北潟湖の柴着と対照的な三方湖のものについては北潟湖と対比させながら次の機会に紹介したい。

柴着の調査については再三竹島泰蔵氏、見沢武氏の御協力を賜つたことをこゝに深謝申し上げる。